様式第３号

令和６年度　学校経営報告書（自己評価）

学校番号	3	学 校 名	静岡県立浜松視覚特別支援学校	校 長 名	大橋　早苗

本年度の取組（重点目標はゴシック体で記載）

	取組目標	成果目標	達成状況	評価	成果と課題
楽しく学び思考力を高める授業づくり	**ア　成長を支える視覚教育の充実と基礎学力問題解決力を身に着ける授業実践**	・幼児児童生徒の基礎学力の定着を図ることができたと評価する職員 90%以上	全体 100%	A	・幼児児童の興味関心や生活課題に応じた学習内容を設定し、学習を積み重ねたことで力が定着した結果、自信が付き自ら取り組もうとする姿が見られた。
		・教材共有への貢献又は活用ができたと評価する職員 80%以上	全体 76.5%	B	・学部により差はあるが教材をアップし、閲覧することはできた。共有データベースのあり方については、３視覚特支間で検討が必要である。
		・視能訓練士や歩行訓練士の指導助言を授業実践等に生かし学習効果が高まったと評価する職員 90%以上	全体 100%	A	・視機能評価・行動観察後のフィードバックや指導後のフィードバックを聞き、教材を改良したり視環境を整えたりした結果、見方や読み書きの力が向上した。今後は、新たな手立てを講じたり、教材づくりをしたりと、個別の見え方に応じた支援へとつなげていきたい。
		・幼児児童生徒の教育的ニーズに応じた教育課程を編成し、よりよい学びにつながったと評価する職員 90%	全体 100%	A	・幼児児童生徒の実態、教育的ニーズに応じた支援の共通理解、また PDCA サイクルで検証することで実態に即した教育課程を編成することができた。
		・個別の指導計画を有効に活用できたと評価する職員 80%以上	全体 100%	A	・個別の指導計画に学習指導要領の各教科の段階、学習内容を記入することで、指導内容を明確に指導に当たることができた。学びのつながり表を作成し教科縦断的横断的に切れ目のない効果的な指導につなげていきたい。
		・幼児児童生徒が楽しく課題解決を経験し日常の疑問を発見し解決に向けて努力する力が育ったと評価する職員 80%	全体 100%	A	・単元のゴールを明確にし、教師が共にゴールを目指したことで、課題解決に向けて自分の枠を超えて挑戦したり繰り返し取り組んだりする姿が見られた。
		・災害時に命を守る力を育成する授業実践の積み重ねにより、効果的な育成イメージが見えてきたとする教員 70%	全体 100%	A	・各種防災訓練で、問題点を自分たちで考え、話し合う活動を取り入れたり体験的な活動を取り入れたりすることで、災害時に実際にどのように行動したらいいのか、イメージを持たせることができた。校内危険箇所を調べたことで、安全に一次避難や二次避難はできるが、登下校時や家庭での自助まで般化していな

様式第３号

	取組目標	成果目標	達成状況	評価	成果と課題
					い。幼児児童生徒の防災課題を見極め、さらなる防災教育の充実に努めたい。
	イ　効果的学びに導く教育DXの推進及びICT機器・情報等活用力を育てる授業づくり	・担当する児童生徒のICT機器等への興味関心や活用力が昨年度より向上したと評価する職員80％	全体 96.4％	A	・インターネットで調べる、ボイスメモで録音する、ワークシートに記入するなど自分の見え方に合った補助具やICT機器を利用して学習することができた。新たなICT機器の使い方についての知識・技能を身に付け、幼児児童生徒に積極的な使用を提案できるようにしたい。
	ウ　社会課題を意識し経験・視野を広げるSDGs教育及びキャリア発達に必要な力を培う指導の充実	・担当する児童生徒の視野が広がり、ＳＤＧｓや世界情勢等への関心が広がったと評価する職員70％ ・キャリアパスポートを有効活用し、児童生徒の自己理解が深まり社会参加への意欲が高まったと評価する職員70％	全体 93.7％ 全体 85.7％	A A	・学習グループに応じて関心のある題材を設定したり新聞を読む時間を設定したりすることで、日本の情勢や世界情勢等へ関心を持つことができた。他学部と活動し全校のために図書室掃除やおすすめ曲紹介を行ったりすることができた。（SDGs17パートナーシップ） ・学校での取り組みを参考にして家庭でも新たな挑戦をした家庭が多くあったが、キャリア発達との関連付けは薄くなってしまった。
安全で豊かな学校生活	エ　健康・栄養に関する知識と理解を深める体力向上につながる体育的活動の充実	・自身の健康を意識し生活習慣が改善できた児童生徒10人以上 ・「心の健康」を意識し生活習慣の改善が図れた児童生徒10人以上	全体 20人 全体20人	A A	・担任と養護教諭が連携し、必要に応じて個別指導を行った。委員会活動を通して健康について考えたり自分の生活を見直したりすることができた。 ・「ひまわりタイム」を設け、いつでも相談できる環境を整えた。より利用しやすいよう周知していく。
		・食や食材に関する理解を深まった幼児児童生徒10人以上	全体 20人	A	・食材を触って学ぶ機会や味わう機会を設けることができ、幼児児童の食や食材への関心が高まった。体力を高めるために給食をおかわりしたり、脱水にならないよう水分補給したりすることができる生徒もいた。
		・スポーツへの関心・運動意欲が高まったとする児童生徒10人以上	全体 16人	A	・体育の授業だけでなく、部活動のスポーツ部にも所属し、主体的に体を動かすことができた生徒がいた。
	オ　緊急対応力と支援活用力向上に向けての避難訓練の充実及び防	・非常時に防災計画書を活用して行動できると考えている職員100％ ・環境備品等の整備不良による事故０ ・様々な非常時を想定し見通しの持てた児童生徒15人以上	全体100％ 全体100％ 全体17人	A A A	・災害時に担当するグループや業務内容、備蓄品の確認などは防災意識を高めることに有効であった。一人一人が自己評価できるようにしていく。 ・整備不良による事故はなかった。 ・実際的で体験的な避難訓練を実施し、児童生徒が防災を自分事として捉え、主体的に考え行動する姿が多くみられた。

様式第３号

	取組目標	成果目標	達成状況	評価	成果と課題
	災体制の見直し	・緊急時対応訓練や研修、または、緊急時対応マニュアルの効果があったと評価する職員90%以上 ・被災時対応計画及び学校再開計画の策定	全体 100%	A	・緊急放送が入った時には自主的に机の下にもぐったり、「今、地震が来たらどうするか。」と自ら話題にしたりするようになった。 ・策定中
	カ　仲間と協働し達成感を共有する経験及び自己肯定感を高める活動の充実	・人権意識が高まり、相手の人権を尊重したかかわりができたと評価する幼児児童生徒及び職員 80%以上	全体 100%	A	・職員が、一人一人に寄り添った関わりや各学部等、人権教育年間計画を作成、評価することで人権を意識した授業展開が図れた。生徒同士で名前を呼ぶ時には、「君、さん」付けをし相手の気持ちを考えた言動ができるようになった。
		・諸活動において自己肯定感を高める工夫ができたと評価する職員 80%以上	全体 100%	A	・頑張りを認めたり、褒めたりする場面を意図的に設けて指導に当たった結果、幼児児童生徒に自信がつき、自分から取り組もうとする姿や支援がなくても自分でやろうとする姿が見られるようになった。
		・学校生活全体を通して、自己肯定感を維持できたと答える児童生徒 70%以上	全体 100%	A	・学校全体に関わる行事や委員会活動で役割を担った生徒の取り組みや学校生活の中で、できたことを大いに称揚した。
成長を支える支援体制	**キ　視覚障害教育センターとしての相談支援機能の強化及び相談担当者の育成**	・外部専門家との有効な連携ができたと評価する職員 100% ・相談者及び外部関係者の満足度 90%以上	全体 100% 全体 100%	A A	・外部専門家と連携し必要な情報を保護者や在籍校に提供した。 ・地域の園や学校を訪問し、見え方や支援機器について説明し、学習しやすい環境を具体的に説明することができた。学習内容によって異なる支援が必要になることもあるため、在籍校と定期的に連絡を取れるような関係を築いていく。相談内容が多岐にわたり、様々な知識を習得する必要がある。教育相談担当者を対象に学習会を行い有効であったため今後も継続していく。
		・新規相談件数増加 10 件以上	全体 11 件	A	・医療機関、保健センター等、関係諸機関と連携し、継続して訪問や講話を実施し理解推進を図っていく。
	ク　交流及び共同学習の充実と幼児児童生徒が地域で豊かに生活するための基盤づくり	・交流及び共同学習が有意義であったと評価する児童生徒、職員 80%以上	全体 88.8%	A	・幼稚部では、交流園の資源（教師、友達、遊具）を活用し良い刺激を受けて活動することができた。小学部は、ねらいを明確にした交流籍交流ができ児童も達成感や成就感を得ていた。中学部は、相手校の都合で実施に至らなかった。高等部では、高校や他県の視覚支援学校とのオンライン交流を通してお互いのことを知る機会となり、有意義な交流ができた。

様式第３号

	取組目標	成果目標	達成状況	評価	成果と課題
		・地域に関心を持って外出参加する機会が増えたと答える児童生徒 60%以上	全体 25%	C	・小学部では、居住地域の店や公園へ日常的に出かける児童や、長期休暇に地域の施設に遊びに出かける児童が多い。幼稚部では、学校での経験を伝えたところ、家庭でも近所の公園で遊んだり、広い公園で虫取りなどしたりして季節を感じる体験をしている家庭が多い。中学部では、初めて地域の避難訓練に参加できた生徒がいた。高等部では、カフェ活動を通して人と関わることへの不安を減らすことができた。
	ケ　保護者地域関係機関に対する教育活動の効果的な発信と連携強化	・学校公開の内容が効果的だったと評価する参加者 100% ・効果的発信方法の確立	全体 100% 全体 98%	A A	・地域住民や学校関係者、企業の方に各学部の紹介や見え方・支援機器の説明、授業参観を通して、本校の紹介をすることができた。参加者に個別に対応できる職員数が限られているため内容や日程を検討し、来年度も継続する。 ・ホームページ掲載方法が変わったため、発信に時間を要したがポッドキャストを取り入れ音声での発信（声のお便り）を継続している。